

氏 名	呂 佳 蓉
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 341 号
学位授与の日付	平 成 18 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	擬音語・擬態語の比喩的拡張の諸相 ——認知言語学と類型論の観点から——

論文調査委員 (主 査) 教 授 山 梨 正 明 教 授 大 木 充 助教授 河 崎 靖

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、認知言語学の枠組みに基づく日本語の擬音・擬態語の実証的研究である。全体は7章から成る。

第1章では、これまでの擬音・擬態語の研究を批判的に検討し、認知言語学の枠組みに基づく本論文の擬音・擬態語の研究に関する一般的な分析の方向が示される。特に、本章では、伝統的な言語学の枠組みにおける擬音・擬態語の研究と記号論の枠組みに基づく従来の擬音・擬態語の研究を批判的に検討し、プロトタイプ理論、拡張ネットワークモデル、比喩的マッピング・モデル、等の認知言語学の分析に基づく擬音・擬態語の研究に関する一般的な分析の方向が示されている。

第2章では、日常言語の記号の発生の観点から、擬音・擬態語の発生のメカニズムを考察している。これまでの擬音・擬態語の研究では、言語学的な分析、記号論的な分析のいずれのアプローチであれ、音韻・形態パターンの類型化と分類が主眼となっており、擬音・擬態語の発生の認知的な基盤および擬音・擬態語の発生を動機づける認知プロセスの解明はなされていない。本章では、認知言語学の枠組みに基づき、日本語の擬音・擬態語の発生の基盤となる、音声イメージの形成、運動感覚モードの形成の認知プロセス、この種の認知プロセスに基づく擬音・擬態語の音韻・形態パターンのスキーマ化のメカニズムを考察している。また、本章では、人間の認知能力の中核をなす比喩、換喩、提喩の拡張能力に基づいて、擬音語起源、擬態語起源の名詞類と動詞類の品詞カテゴリーの認知的規定を試みている。

第3章では、既存の慣習化された日本語の擬音表現、擬態表現だけでなく、実際の生きた会話文脈において創造的に使用される擬音・擬態語の表現を体系的に分析し、サウンドシンボリズムの認知モードと知覚、運動感覚、等の認知モードが、一見したところ恣意的に見える日常言語の記号の形式と意味の有縁性の基盤として重要な役割を担っている点を明らかにしている。

第4章では、日本語の擬音・擬態語の発達過程を、音韻・形態的な構造のパターンに基づいて分析している。分析の結果、日本語の擬音・擬態語に関しては、まず分布関係において反復形の ABAB 型(「ころころ」型)が中心的な位置を占め、その周辺に ABQ 型(「ころっ」型)、ABN 型(「ころん」型)、ABri 型(「ころり」型)が分布し、ABAB 型の音韻・形態的な構造のプロトタイプからの拡張型として ABN 型、ABri 型、等の構造が継承されている事実を、認知言語学の枠組みに基づく拡張ネットワークモデルによって体系的に規定している。また、本章では、以上のタイプの日本語の擬音・擬態語の音韻・形態的な構造の各タイプを統計的に分析し、ABAB 型が全体の70%以上を占める事実を明らかにしている。この事実、以上の擬音・擬態語のうち、ABAB 型をプロトタイプとして認定する根拠としても重要な意味をもつ。以上は、共時的な視点からの考察であるが、本章では、さらに通時的な視点からも日本語の擬音・擬態語の発生過程を検討し、特に反復形の ABAB 型の構造のパターンの出現が、他の構造のパターンをもつ擬音・擬態語よりも早く出現している事実を確認している。この事実も、上記の反復形の音韻・形態的なパターンをプロトタイプとして規定する根拠の一つとなる。

第5章では、擬音・擬態語それ自体の形式的な特性だけでなく、擬音・擬態語の創造的な意味機能を、五感、運動感覚、等の人間の身体的な経験に根ざす比喩の修辭機能とメトニミー効果の機能との関連で分析している。従来の研究では、これ

らの機能との関連で、擬音語と擬態語の創造的な意味機能の違いを明らかにする分析は試みられていない。これに対し、本章では、基本的に擬音語の創造性の認知的な基盤は主にメトニミー効果に起因するのに対し、擬態語の創造性の認知的な基盤は主に比喩の修飾機能に起因する点を明らかにしている。例えば、擬音語の創造的な使用の典型例である「チーンする」は、基本的には、〈電子レンジで温める〉という行為を意味する。この種の擬音語は、問題の行為のフレームの全体を言語的にコード化しているのではなく、その行為のフレームの一側面である音声表象をメトニミー的（ないしは換喩的）な参照点としてコード化することにより、問題の行為をそのターゲットの意味として起動している。また、擬態語の創造的な使用例である「（家で）ごろごろする／ごろごろしている」のような擬態語の表現は、〈家で何もしないでいる〉を意味するが、この場合には、基本的にモノの転がる様態が、比喩によるソース・ドメインからターゲット・ドメインへの写像を介して、上記の行為の意味を起動している。本章は、以上のメトニミー効果と比喩の修辞性に基づいて、日本語の擬音・擬態語の創造的な意味機能の体系的な分析を試みている。

第6章では、認知言語学の中心的な概念である構成体の観点から、擬音・擬態語の名詞的用法、動詞的用法、等の創造的な生成のメカニズムを考察している。言語単位の共起関係からみた場合、これまでの擬音・擬態語の研究は、主に副詞的な修飾の機能をになう慣用化された擬音・擬態語の記述と分類が中心となっている。これに対し、本章では、ゲシュタルト的な構成体の観点から、副詞的用法だけでなく、音韻・形態モードがメトニミー的に名詞カテゴリーとしてコード化される用法、音韻・形態モードが形式述語の修飾表現としてコード化される動詞的用法、形容詞的用法、形容動詞的用法の諸相を考察している。また、以上の考察に基づき、部分の意味の総和からは予測不可能な擬音・擬態語の構成体の意味のゲシュタルト的な性質の諸相を明らかにしている。

第7章では、理論面・実証面の双方の観点からみた本研究の意義と展望が論じられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、日本語の擬音・擬態語の拡張のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。擬音・擬態語の研究では、言語主体とは独立した形式と意味の対応関係からなる抽象的な記号系の分析が中心になっており、本研究が主眼とする、五感、体感、運動感覚、等の身体的経験に根ざす記号系の分析は体系的にはなされていない。また、これまでの擬音・擬態語の研究では、言語学的な分析、記号論的な分析のいずれのアプローチであれ、音韻・形態パターンの類型化と分類が中心になっており、擬音・擬態語の発生の認知的な基盤および擬音・擬態語の発生を動機づける認知プロセスの解明はなされていない。本研究の独創的な点は、認知言語学の枠組みに基づき、日本語の擬音・擬態語の発生の基盤となる音声イメージと運動感覚モードの形成の認知プロセスに注目し、この種の認知プロセスに基づく擬音・擬態語の音韻・形態パターンのスキーマ化と意味拡張のメカニズムを考察している点にある。

本研究では、認知言語学の中心的な概念である構成体の観点から、擬音・擬態語の名詞的用法、動詞的用法、等の創造的な生成のメカニズムを考察している。従来の研究では、主に副詞的な修飾の機能をになう慣用化された擬音・擬態語の記述と分類が中心となっている。本研究で注目すべき点は、ゲシュタルト的な構成体の概念に基づき、副詞的用法だけでなく、音韻・形態的な言語ユニットの感性モードと知覚モードの拡張を介して生成される擬音・擬態語の名詞的用法、動詞的用法、形容詞的用法、形容動詞的用法の諸相を体系的に分析し、部分の意味の総和からは予測不可能な擬音・擬態語の構成体の意味の非線形的な創発性の諸相を明らかにしている点にある。以上の言語ユニットの意味の創発性の解明は、従来の意味の構成性の原理に基づく概念意味論の限界を明らかにし、認知言語学のゲシュタルト意味論の分析を支持する根拠として重要な意味をもつ。

本研究では、擬音・擬態語それ自体の形式的な特性だけでなく、擬音・擬態語の創造的な意味機能を、五感、運動感覚、等の人間の身体的な経験に根ざす比喩の修飾機能とメトニミー効果の機能との関連で分析している。従来の研究では、これらの機能との関連で、擬音語と擬態語の創造的な意味機能の違いを明らかにする分析は試みられていない。本研究の意義は、基本的に擬音語の創造性の認知的な基盤は主にメトニミー効果に起因するのに対し、擬態語の創造性の認知的な基盤は主に比喩の修飾機能に起因する事実を明らかにしている点にある。

本研究は、次の点で従来の理論言語学の分析を越える実証的な分析を試みている。第一に、擬音・擬態語に関するデータ

を、作例に限らず、コーパスの統計的データやシソーラスを用いて体系的に収集・分析し、擬音・擬態語の事実に関するより信頼性の高い結果を出している。第二に、本研究は、単に共時的なデータを分析するだけでなく、擬音・擬態語の発生と使用のゆらぎを反映する言語運用的なデータも分析の対象としている。本研究の以上のアプローチは、統計的データを重視する認知言語学の用法基盤モデルのアプローチの妥当性を裏づけるための一つの検証の場を与える。第三に、本研究は、擬音・擬態語の問題が、単に音韻・形態的な語彙レベルの言語パターンの拡張の問題にとどまらず、句レベル、統語レベルの言語パターンの拡張の問題にまで影響を与える点を、統計的に観察された広範な言語事例に基づいて明らかにしている。第四に、本研究では、擬音・擬態語の共時的な意味拡張のプロセスを、認知言語学の枠組みにおける認知図式と意味の動的ネットワークモデルに基づいて明示的に定式化している。

本論文は、主に共時的な観点からみた擬音・擬態語の意味拡張のメカニズムに関する研究である。通時的、歴史的な視点から見た擬音・擬態語の体系的な研究は、今後の課題として残されるが、本論文の研究成果は、通時的、歴史的な観点からみた意味変化の分析への基礎的研究としても注目される。また、これまでの意味変化の研究は、名詞類と述語類の一部を中心とする、意味の特殊化と一般化に関する記述的な分析が中心になっているが、言葉の身体性を反映する擬音・擬態語の意味変化のメカニズムの体系的な研究は試みられていない。本研究で明らかにされた共時レベルの意味拡張のメカニズム（特に、メタファー、メトニミー、焦点シフト、等の認知プロセスを反映する語彙の共時レベルの意味拡張のメカニズム）は、通時レベルにおける意味変化の要因を明らかにしていくための検証の場を提供する。

さらに、本研究で明らかにされた意味拡張のメカニズムは、言語の習得過程における語彙発達のメカニズムを明らかにしていくための基礎的な研究としても重要な意味をもつ。これまでの言語習得の研究では、基本的な名詞類、述語類の語彙の習得過程の研究は進んでいるが、擬音・擬態語の感性、身体性を反映する語彙習得の研究は体系的にはなされていない。本研究は、固体発生の観点から見た記号の発生と言葉の創造性の解明を図る言語習得と認知発達の関連分野の研究への基礎的な研究としても重要な役割をになう。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは、言語、知覚、思考、推論、等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学への貢献がさらに期待される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年7月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。